



これまでに出会った転入女性たちの変化を  
実話をもとにサンプルストーリーにまとめました

## tentenサンプルストーリー集 vol.1

2024年4月

[ 発行人 ] 藤本菜月

[ 発 行 ] 一般社団法人 tenten

〒960-8041

福島県福島市大町2-18石屋小路ビル2F

TEL 024-529-5895

FAX 024-529-5896

mail info.tenten.fukushima@gmail.com

WEBサイト <https://tentent.info/>

## 視点・マインドが変わり行動を起こし始めた Hさん(30代)

青森県生まれ。大学進学を機に茨城県、就職を機に東京へ。その後結婚、出産。夫の福島への1年間の出向が決まり、4歳(年少)の子どもと共に家族で福島市に転入。



東京でフルタイム勤務をしながら夫と協力して子育てをしていたHさん。夫の福島への出向が決まり、悩んだ末、働きながら一人で子育てはできないと、仕事を辞め福島と一緒にいく決断をしました。

直前まで仕事をしてきたこと、住む場所も夫の職場が準備してくれたことから、福島についてほとんど調べることなく転入。福島に来て、まずは子どもの幼稚園探しからスタートしました。幼稚園のことを聞く人もいないので、すべてネットで情報収集。ペーパードライバーのため、徒歩や自転車を通えるまたは園バスがある幼稚園をまず探しました。また1年間の期間限定の福島生活であることから入園費や制服などにお金がかからない幼稚園を探していたのですが、そのような幼稚園が少なく、4月という時期で空きがない状態…そんな中やっとみつけたこども園は、電車とバスを使わないと通えないところでした。

4歳の子どもを連れて、電車とバスを乗り継いでの通園生活がはじまりました。子どもを送ってから家にいれる時間はたった2時間。送り迎えてヘトヘトになる毎日。さらにはアパート住まいで両隣に気を遣う生活を強いられ、気が休まる時間がありませんでした。「そのころは暗黒期でした。一日をやり切ることに精いっぱい、福島を楽しむという気持ちにもならなかった。」と振り返ります。

そんな時、夫が職場の人から東北主催tenten企画運営の「桃狩りイベント」のチラシをもらってきました。「一人だと緊張するけど家族で参加できるし、桃って福島っぽいからいいな」と申し込み。イベントに参加してみると、同じこども園に通わせている方とも知り合いになり、子育て情報を聞くことができました。他の参加者と交流し、同じような境遇でも楽しそうに福島で生活している人がいることを知りました。それまでの日々を暗黒期と表現するほどふさぎ込んでいたHさん。自分もこうなれるかもしれない、これから自分も福島を楽しめるかもしれない、と思考が変わった瞬間でした。tentenの存在も知ることができたため、すぐにコミュニティにも登録をしました。

その後はtentenコミュニティに流れてくるイベント情報を見て、tenten cafeやtenten主催のワークショップにどんどん参加。そこで知り合った方とランチに行ったりカフェに行ったり、福島で楽しむ時間が増えてきました。これまでは期間限定の1年間に対してとりあえず時間が過ぎればいいと思っていたのが、今となっては外の福島を知らない人にどこを見せると楽しんでもらえるかな、と探すようになったのです。

ずっと福島に住み続けてもいいかもしれない…少しずつそう思うようになってきました。Hさんの本当の意味での福島生活は、始まったばかりです。

夫の仕事の都合で福島に来たHさん。tentenと出会い、福島を楽しんでいる同じ境遇の女性達と出会い、暗黒期から福島を楽しむ気持ちへマインドが変わったと聞いて本当に嬉しく思います。旦那さんからも「奥さんが元気になってきました！ありがとうございます！」と連絡をいただきました。奥さんや子どもが福島を楽しむことが旦那さんのためにもなり、定住者を増やす事にもつながる可能性があるかと実感させてもらいました。マインドが変わったHさんが、これからどれだけ福島を楽しんでくれるかtentenとしても楽しみです！

## 視点・マインドが変わり行動を起こし始めた Uさん(40代)

二本松市生まれ。進学を機に東京へ。その後結婚、出産。子どもの学校環境を変えるため、2021年冬に夫と小5の娘と一緒に福島市にJターン。



都内で公立小学校に通っていた娘さんが「学校に行きたくない」となり、得意だった絵も描けなくなってしまったことから、学校環境を変えるために移住を考えるようになったUさん。移住先に求めたのは娘さんの発達を相談できる病院が近くにあることでした。

福島へのUターンも視野に入れ、インターネットで調べましたがなかなか発達相談ができる病院の情報が出てきませんでした。そんな時、福島市内の大学に通う姪から「大学に相談室があるよ」という情報を教えてもらいました。

車の運転ができないUさん。駅前であれば車がなくても生活ができること、何かあったらすぐに相談室に通えること、最終的には娘さんが「福島に行きたい」と選んだことから、家族で福島市へのJターンを決意しました。

福島に来た頃は娘さんの登下校に付き添い、何度か授業も見学させてもらったり、在宅ワークと引っ越しの片づけをしりたりしていると一日があつという間に終わっていました。心配していた娘さんは、転校生が多い学校への転校だったため、先生も生徒も転校生の受け入れに慣れていて、スムーズに馴染むことができました。「福島はお友達がみんなすごくいい子たちばかりで、娘も落ち着いて生活できるようになって、また得意の絵を描き始めたんです。それがすごく嬉しかったです！」とUさん。次第に娘さんの事から福島という地域にも意識を向けられるようになりました。

ちょうどその頃InstagramとFacebookで「WELCOMEワークショップ」の広告を見つけます。福島の情報を知りたいと思っていましたが「転入女性といっても、自分は移住してきた経緯が他の人とは違うから、他の方とは共感する部分はあまりないだろう」と流し見してしていました。しかし広告が何度か出てくることで気になり、モノづくりをしたくて申し込むことにしました。

自己紹介でみんなが福島に来るまでの話を聞くとそれぞれドラマがあり、自分が知らない世界の話を聞くことができワクワクしたというUさん。「毎週楽しみで、WELCOMEワークショップに参加して考えが変わりました。大変なのは自分だけじゃないと分かったし、講師の方の話は同じ福島で何かに挑戦している身近な人という感覚で、自分も何かできるかもしれないとすごく刺激になりました。」と振り返ります。

ワークショップが終わった後も、親身にいろんな情報を提供してくれるtentenに対して「移住者のその後」をちゃんと見てくれているんだなと信頼と安心感が。そんなtentenスタッフと接することで「娘を元気にしてくれた福島のために、私もなにか貢献(恩返し)したい！」という気持ちが強くなりました。

東京にいたころからメタバースの仕事をしていたUさん。WELCOMEワークショップの最終回に福島市のマリッジサポーターをしている先輩転入女性と出会い「メタバース婚活」をどこかの県でやっていたな、と思い出しました。私が福島に貢献できることはメタバースかもしれない！と少しずついるんな人に相談するようになりました。外でも働きはじめた頃、上司から「やってみたらいい！」と背中を押されたことでトントン拍子にメタバース講座とメタバース婚活をやることに。「初めての経験で本当に大変でしたが、最初の一步を踏み出せました。」Uさんなりの福島への恩返しははじまりました。

モノづくりをしたくてWELCOMEワークショップに参加してくれたUさんが、福島のために何かをはじめるとは、tentenとしても意外でした。移住後は娘さんのことで頭がいっぱいだったUさんが、イベントを通じて前向きに活動している人たちと出会い、刺激を受け、自分も何かやりたい！と思ってくれた気持ちがすごく嬉しいです。メタバースのことも一番に相談してくれましたね。「流れに乗っていたらこうなっただです」とUさんは話していましたが、流れは待っていても来ません。自ら動いて発信したからできた流れです。またなにかあったらいつでも相談してくださいね！

## 居場所ができ、仲間から刺激を受け行動を起こした Sさん(60代)

二本松市出身。就職を機に上京。東京で就職し、30年以上勤める。体調を崩したこともキッカケとなり、早期退職。2021年3月末に実家にUターン。



東京で楽しく生活していたSさん。しかし、55歳の時に喘息を発症。東京での生活で喘息は悪化し、一人暮らしにも不安があったためUターンを決めました。空気がいい、食べ物おいしい環境で体調は回復！しかし実際に30年ぶりに地元に住んでみて驚いたのは「高齢化している」「子どもがいない」「情報が取れない」ということでした。面白そうなイベントや勉強会などの情報は自ら取りに行かないと入ってこない状況でした。

福島はいいものはあるのに発信が足りないと東京にいながら感じていたSさん。福島に帰ったからには、好きな日本酒と食(おつまみ)を得意のイラストを使って発信し、地域の役に立ちたいと意気込んでいました。商工会主催の起業セミナーや女性向けのセミナーなどに積極的に参加しましたが、なかなか思うようにいかずに焦りとモヤモヤを抱えていました。

そんな時、いつも見ているFacebookで偶然tentenの「WELCOMEワークショップ」の広告が。講師の方々の活動に興味を持ち参加したい!と思ったけど、若い人ばかりなのかなと気になっていました。

実際参加してみると年齢は離れていてもみんなと心地よく交流できるように、tentenスタッフがアシストしてくれました。参加者同士が自分自身のことも含め色々話しやすい雰囲気、欲しい情報もたくさんもらえて毎回楽しく参加できました。

「tentenから教わったのは『動く』ということ。地元に戻ってきて、地元の人たちが『動いている』のを見たことがなかったんです。講師の人もみんな『動いている』人たちで、すごく刺激を受けました。私ももっといるんなところに行ってみよう、やってみようと思ってきました。」

その後その言葉の通りにWELCOMEワークショップ講師の花農家さんへアルバイトに行ったり、日本酒関連のイベントなど興味を持ったものには積極的に参加したりするように。花農家さんでは、これまで身近な存在だった菊の栽培にもすごく手間がかかることを知り、菊や花に対する見方が変わりました。また地元の女性や高校生たちと一緒に仕事をして、地域の人との関りも増えました。日本酒は福島の日本酒の知識を身に付け、利き酒大会の予選会にも参加するほどのめり込み、楽しんでいます。

「福島に帰ってきた当初は『なんで福島はこうなの!?!』と地域に対する不満の方が大きかった。でもいろんな人と交流して居場所ができた今、福島のよさを再発見して、何も無いのがいいと思えるようになって焦りがなくなってきました。あんなにがむしゃらになっていたのは、人との交流がなく孤独で、誰かに認めてほしかったからだと思います。」

今では肩の力が抜けて、純粋に福島を楽しんでいるのがSさんの表情から伝わります。

WELCOMEワークショップに申し込んでくれた時に「私の年齢でも大丈夫ですか?」とお問い合わせいただいたことを覚えています。実際にお会いしてみると、好奇心が強く若い人とも分け隔てなく会話ができるSさんの明るさで、ワークショップはとても楽しい雰囲気になりました。積極的に動くことで人との繋がりも増え、福島の良さを再発見しているSさん。Sさんが活躍する場は、これからもっと増えるはず。想いを持って行動するSさんをtentenも応援します!

## 居場所ができ、行動を起こした Aさん(30代)

東京都出身。東京で湯川村出身の夫に出会い、結婚出産。3男の出産をキッカケに2020年7月に家族で湯川村にUターン。



東京で夫婦共働きで男の子2人の育児をしていたAさん。3人目の妊娠が男の子だと分かった時に、のびのびとした環境で子育てをしたいと旦那さんの地元で家族で行くことを決めました。義父と曾祖母が住む家に同居することに。免許はなかったものの、義父から「車があれば生活できる」と言われたのと、夫の地元でもあるため特に不安も感じることなく引っ越しをしました。

転入してから、何もかも初めての事が起こります。集落のお宅に挨拶に行くと、若い人はおらず「大変だけど頑張って」と言われました。コンビニも近くになく、買い物もすぐに行けない環境の中、義父との同居、曾祖母の介護、農業の手伝い、自動車教習所への通学。自分に降りかかる負担も多く、田舎の生活で慣れないことばかりでストレスがたま一方でした。しかし周りには相談できる人が誰もいません。「こんなことで悩んでいるのは私だけなんだ」とふさぎ込むようになりました。

転入してから約半年後、元々飲食の仕事をしていた夫と共に、村に飲食店をOPEN。お客さんと話すことができるようになり少しずつ気持ちが安定してきました。人と話すことがこんなに大切なんだと痛感しました。

その後会津若松市に店舗を移転し、家族で引っ越し。アパート近くの児童館に行ったときに、tenten cafeのチラシを見つけました。「結婚で転入した人、お友達を作ったり情報交換をしませんか」という呼びかけに「こういうことで悩んでいるのは私だけじゃなかったんだ!同じような人がいる!ここに行ったら人と知り合えるかもしれない!」とすぐに申込み。躊躇は全くありませんでした。

実際に参加してみると、同じような境遇の方がたくさんいました。久しぶりに人と心から楽しく話すことができ、参加して良かったという充実感でいっぱい。tenten cafeの2時間だけでは話足りず、別日にすぐに数名で集まってランチ会を開催。同じ気持ちの同じ立場の人と知り合って、みんなでこの地に足りないことをやりたい!という思いが出てきたのです。

tentenがキッカケとなり、何気なくくだらない会話をできる人ができ、友達ができ、自分の居場所ができ、生活がガラッと変わったAさん。「東京はなんでもあって、自分がなにかをやる必要性を感じたことはありませんでした。tentenを通じて、色んなサポートが足りてない地域での地域活動の大切さを知り、会津では自分でもなにかできるんじゃないかと思うようになったんです。」

自分にできることとして、tentenをキッカケにできた仲間とtenten会津地域サポーターに立候補し、サポーターとしてtenten cafeの運営のお手伝いを始めました。「自分と同じように何かがキッカケで会津に来た人たちに、会津の事を教えてあげたいし、ただ過ごすだけでなく楽しく過ごしてほしいんです!」

居場所がなくて苦しんでいたAさんが、今は笑顔で転入者を迎え入れる立場になっています。

こんなことで悩んでいるのは私だけだ、と思っていたAさん。tentenとの出会いで「自分一人じゃない!」と分かってからは、知り合いが増え、友達ができ、地域活動にまで興味を持つようになりました。居場所ができることがこんなにも人にパワーと意欲を与えるんだ、とAさんを見て感じます。まずは居場所づくり。tentenの活動の原点を思い出させてくれるAさんの事例です。



## 人と繋がり、地域を知り、福島の暮らしを満喫している Kさん(30代)

静岡県生まれ。大学進学を機に東京、就職を機に山形へ。転勤族の夫との結婚し、妊娠を機に退職。夫の福島市への転勤が決まり、未就園児の子どもと共に2021年夏に福島市に転入。



当時2歳の子どもを連れて福島市に転入したKさん。転入した当初は、福島市で子どもと一緒に生活リズムを作るのに必死でした。遠出することはなく、出かけるのも子育て支援センターや近所の公園、そして買い物のスーパーのみという日が続きました。

子どもの入園のためにネットで情報を探しても細かい情報が載っておらず、知り合いもいないため聞く人もいない…そんな時、ネットでtentenの幼稚園の紹介記事を見つけ、tentenの存在を知ります。tentenのことを調べると転入してきた女性のコミュニティもあると知り、そこから情報がもらえたらいいなという思いですぐに登録。tentenが福島市内でお店(ent)をオープンさせたことも知ります。「どんな人たちが運営しているコミュニティなんだろう」と実際にお店を訪問。お店に立っていた藤本と色々話し、主催者の顔や人柄を知ることができました。しかしtenten cafeは気になるものの、子連れだとゆっくり話せないかもしれないと参加を躊躇していました。

福島市に転入してから9か月経ち、子どもがこども園に入園。ようやく自分一人の時間ができ、そろそろ福島を楽しみたいと、まちとつながる旅に参加。まちのお店は気になってもなかなか最初の一步が出ず入る勇気がなかったKさんですが、まちとつながる旅で案内してもらい、行き方や車を止める場所、お店の空気感など知ることができました。

福島市に住むことに「安心感」が生まれ、紹介してもらったお店にも子どもと一緒に再訪問。まちとつながる旅で訪れた場所の1つが定期的にイベントを開催していたので、出店者さんと顔見知りになることも。つながった出店者さんからイベント情報がInstagramを通してどんどん入ってくるようになると、興味があるものには子どもと一緒に出かけました。子どもが人懐っこい性格ということにも助けられ、子どもと一緒に覚えてもらって、知り合いが増えていきました。さらに知り合いが人を紹介してくれるという連鎖が続いています。

tentenのコミュニティで知った国見町の「桃の木オーナー」にも登録。子どもに年間を通じて農業を体験させたいと思っていた時に、入ってきた情報でした。そこでも知り合いを増やし、情報も収集し、国見町の農業体験モニターにもなりました。

「人の付き合いが広がり始めて、すごく楽しいです。山形の地方部から来たので最初、福島市は都会だろうなと思って来ましたが、いい意味で都会じゃない。縁を大切に作る街です。今は人に会うことを目的に動いている感じです。」

ゼロから始まった福島の生活。Kさんが動くことで広がり、今は家族みんなで楽しんでいます。

tentenで得た情報をすぐに自分のものにして、行動するKさん。行動した先でも物怖じせず人と話をするからこそ、次々と人と繋がりを作れているのだと思います。そのキッカケはtentenだと話してくれました。「自分から繋がっていかないと都会に住んでいた時のように人間関係もドライのままだったかもしれない」人と繋がっていくには、自ら飛び込んでいく勇気が必要なんだとKさんから教えてもらいました。SNSが普及している今は、広く浅く人と繋がることができます。それが心地いいというKさん。福島市を思いっきり楽しんでくださいね!

## 居場所ができ、転勤族から定住した Wさん(30代)

秋田県生まれ。大学進学を機に山形県へ。全国転勤族でその当時白河市で働いていた夫との結婚を機に、2017年に白河市に転入。



白河はすでに夫が住んでいたことや、出身や大学後の生活も同じ東北だったということから、転入することにネガティブな思いはなかったWさん。仕事も転入前に探し、転入と同時に働きはじめました。生活に慣れるのに必死ではあったものの、孤独を感じることはなく、暇を持て余すこともありませんでした。

しかし、平日は仕事と家事で一日が過ぎ、休みの日は、郡山に行ったり、大学の友達に会いに県外に行ったりと、白河を楽しむという感じではありませんでした。

4年経ったころ、妊娠・出産。子どもが生まれてからWさんの生活が一変します。仕事を辞めて赤ちゃん向き合う日々が続く、漠然とした不安が押し寄せてきました。これから子育てしながら夫も転勤がある状況で、自分のキャリアや家庭の将来像のイメージがつかなかったからです。「転勤族の妻」「仕事どうなる」などのキーワードで検索を続ける日々。そこでtentenのWEBサイトを見つけたのです。発信している情報を見て、マイノリティである転勤族の妻に寄り添った活動だと思って、すごく嬉しくなりました。

同じ境遇の人と話がしたい!という一心で、躊躇なくtenten cafeに参加。参加してみると、楽しく白河で生活している人が多く、あまり悲観的な人がいなかったことに驚きました。自分は不安を抱えていたのに…そういった人たちと繋がれたことで少しずつ前向きになってきました。

子どもがもう1人生まれ、アパート住まいに窮屈感を持ち始めたころ、一軒家住まいを検討し始めました。夫が転勤族ではあるものの、今後の転勤地を考えるとお互いの実家がある秋田に一番近いのは白河であること、自分も白河で前向きに暮らし始めたこと、子どもが楽しく幼稚園に通い、仲のいいお友達ができ、楽しく白河で暮らしていることから、夫に「白河に家を建てるのはどうかな?」と相談したところ、夫も同じ思いを持って「拠点は白河、もし転勤になったら単身赴任する」との決断に。もともと、子育てするなら福島がいいなと思っていたのも一因でした。自分と夫が育ったような自然が豊かな環境、白河の手厚い子育て支援、地域の方が子どもに対して優しく接してくれる雰囲気、それが白河に住み続ける気持ちを後押ししました。

マイホームが建ち、自分の人生にも見通しがつきやすくなったWさん。今は、自分の出産育児経験を元に、自分のように近くに両親や親族など頼れる人がいない子育て中の方に向けた産後ケアサポートとして家事代行と保育訪問サービスを立ち上げたい!という目標ができました。今度は私が困っている人を助けたい、そのために今は白河で人との繋がりを作ったり、白河で今後の目標達成のために勉強になりそうな仕事にチャレンジしています。

白河で人と繋がり、色んな事を知ることで、白河に一層愛着を持ってきているというWさん。「子どもは「白河にはなにもない」じゃなくて、「白河にはこういうことがあるよ」とポジティブなことを伝えたいです!」と笑顔で話してくれました。

転勤族から定住者へ。転勤族でもいつかはどこかに定住します。家族が気に入った土地、馴染んだ土地、受け入れてもらっていると感じた土地。転勤族にもそう思ってもらえるような地域にすることが定住者を増やし、移住者も増やすのではないかなと思わせてくれるお話でした。tentenの活動もそのキッカケになっていたのですごく嬉しいです。腰を据えて白河で生活し始めたWさんが、これから白河のキーパーソンになる日も遠くない!

## 新しい挑戦をしたことで役割ができ、 地域プレーヤーとなった Yさん(30代)

東京都出身。元SE。旦那さんの転職を機に、2010年に福島市に転入。転入後は大学広報補佐に5年間従事し、妊娠を機に退職。



子育てに専念していた時に、ママ友からWELCOMEワークショップの募集を教えてくださいました。すでに福島市に6年住み、ママ友もいたYさんは、孤独や不安を感じているわけではありませんでした。「そのころは色々な託児付きイベントに出向いていました。ワークショップも実は託児狙いで申し込んだんです。」

このWELCOMEワークショップに参加したことを機に、tentenのSNSに登録し、tentenからの情報をキャッチするようになります。

そんな中、Yさんの目に飛び込んできたのは「ライター講座参加者募集」の文字。仕事を辞めて子育てだけの日々で少し物足りなさを感じていたころでした。もともと文章を書くことが好きだったYさん。「ライターだったら子育てしながらできるかもしれない」と、迷いなく申し込みました。「絶対にライターになるんだ!」という強い意気込みはないものの、新しい挑戦をはじめます。実際にライター講座を受けて、「自分にできるだろうか」という不安を感じつつも、ライター講座を受ける条件であった3記事を書くことに一生懸命取り組みました。

いくら文章を書くことが好きでも、ライターを仕事にするのは難しい。少し記事を書くことを休んだ時期もありました。しかし、ライター講座受講してから2年後、下の子が幼稚園に入園したのをきっかけに、本気でライターを目指すように。

「もう子育てを理由にできなくなりました。何か仕事をしないとと思いました。」

そのころにはすでにtenten fukushimaのサイトには自分のポートフォリオができていました。tentenで開催したクラウドソーシングセミナーにも参加したYさんは、クラウドワークスに登録し、自分でライティングの仕事を取りに行くようになります。tentenで基礎を身につけていたYさんは、クラウドワークス経由で記事を何十本も書き始めます。

そんな時、tentenから「福島市の観光サイト『福島市観光ノート』でライターを探しているからチャレンジしないか」と声をかけられました。どれくらいのレベルが求められるかわからないけど、学べるのが多そうと思い、こちらでもチャレンジします。わからないことは先輩ライターさんにも聞きながら、取材のアポ取りや記事執筆のスピード感を求められる環境で、どんどんライターとしてのスキルを身につけていきます。

福島市観光ノートのライターになったことで、福島の地域の人と関わる機会が一気に増えたYさん。取材を通じて色々な活動をしている方、頑張っている方がたくさんいることに気づきます。その人のバックグラウンドや思いを聞くことができ、「だったらあの人を紹介してみよう」と、人と人とを繋げる活動もできるように。書くだけではないライターの醍醐味も感じています。

「これまでは福島にただ『住んで』いました。情報を発信する側になって初めて見えてきたことがたくさんあります。今は、私にできることで福島で頑張っている人たちの助けになりたいです。」

Yさんは目を輝かせています。

「tentenがなかったら今の私はいない。」と言ってくれたYさん。tentenのライター講座とクラウドソーシングセミナーを受けたことがキッカケではありませんでしたが、そのきっかけを活かして、さらに自分から動くことで、どんどん前進していきました。そんなYさんだからこそ、tentenもライターのお仕事を安心して紹介できました。福島市観光ノートのライターになったことで地域に入り、地域のことや人を知り、地域に対する見え方が変わりました。ただの住民から、「ヨソモノ視点を持ちながら、福島情報を外部に発信する」という居場所と役割を見つけ、これからは磨きをかけていくYさんの今後が楽しみです。

## つながり・居場所ができ、地域プレーヤーとなった Mさん(30代)

東京都出身。東京勤務時に同僚であった農家の息子さんと結婚するために、二本松市に転入。代々続く旦那さんの家業に義理父母とともに携わっている。



地方に移住することについては全く抵抗がなかったMさん。同居だったこともあり、孤独を感じたりすることはありませんでしたが、田舎暮らしの大変さを実感します。まずは近所付き合いと田舎の風習。消防団や地区の運動会など昔から続く活動を強制的にやらされることに疑問を抱きました。まだ子供もいなかったため、頻りに東京にも帰って来たこともあり、寂しさを感じることはありませんでした。でも、同じように農家に嫁ぎ、同居をしている人に色々相談したりしたいなという思いはありました。

tentenのことを知ったのは、福島に来て3年目の時。WELCOMEワークショップの講師依頼の相談を義父が受けたことがきっかけでした。義父が「そういえばうちの嫁も東京から来たんだよね。だから講師は同じ立場の嫁がやった方がいいね。」と紹介してくれたのです。それがキッカケとなり、tentenのサイトを始めて見たMさん。「もっと早く知っていたら、早く調べていたらよかった!」と思いました。そして、同じ立場の人に会えるかもしれない!という期待を抱き、参加者としても参加することに。どんな人がいるのかな、お友達できたらいいなとワクワク感を覚えました。

WELCOMEワークショップには、同じように農家に嫁いだ方や、有機農業をやりたくて東京から移住した若い女性、そして地域資源を使ってお茶の開発をしている女性など共通点のある女性が集まっていました。初日の自己紹介で、みんなの経歴や興味などを詳しく聞き、一気に親近感が湧いたMさん。ワークショップの間も会話が止まりません。もっともっと話したい、そんな気持ちになりました。

WELCOMEワークショップが終わった後、参加者とSNSで繋がり、そこで二本松の農業女子会を紹介してもらいました。すぐに入会し、二本松で農業を頑張っている女性たちと出会います。中には加工品を作っている方もいて、いずれは加工品にもチャレンジしたいと思っていたAさんにとって、良きアドバイザーとの出会いでした。お茶を作りたいという参加者ともつながり、いずれMさんが材料提供をすることが決まりました。

「WELCOMEワークショップがきっかけとなって、地域につながりが増えました。ちょうど家業も新しい事業や取組をしたいなと思っていて、人との出会いでそれが現実的になってきた感覚です。」

家業を手伝うようになってから、色々テコ入れをしたい、自分としての取組も始めたいとずっと思っていたMさん。同じ地域で頑張る女性たちとの出会いで、それが早くも現実として動き出しそうになっています。出会いによって、歯車が一気に回り始めました。「もっと早く知っていればよかった」というように、動き出すには時間が必要なのではなく、キッカケが必要なのだということを改めて感じさせてくれたのがMさんの例です。これからMさんは地域のキーパーソンとなり、転入してくる女性たちのよき先輩になることでしょう。



## 居場所ができ、転出後も関係人口になる Iさん(50代)

長崎県出身。就職を機に福岡県に引っ越し、そのまま福岡県に居住。子どもが就職し、子育てが一段落したところで、福島県に転勤辞令が出て2018年夏に単身赴任で福島市へ転入。2024年春には東京へ転勤が決定。



九州で約30年間勤務していたIさん。子育てが一段落し身軽になったタイミングで、社内の震災復興に関わる部署で人員募集があり、自分も携わりたいと福島へ異動願を出しました。それまで九州以外で生活をしたことがなかったIさんですが、仕事への使命感から福島市に引っ越すことに不安はありませんでした。福島の情報も職場の人たちから聞いたりすることができました。

「転入して特に困ったことはありませんでした。友達も大人になってからはそう簡単にできるとは思っていませんでした。元々『お一人様』に淋しさを感じるタイプじゃないので、苦ではなかったです。強いて言えば婦人科系の病院を探すときに、職場が男性ばかりで誰にも聞けなかったことぐらいですね。」

家族と離れ、25年ぶりに一人の生活を満喫していたIさん。しかし、そこにコロナがやってきました。会社での飲み会も、はたまた雑談すらなくなっていく日々。友達がほしいわけではないが、どうでもいい雑談をする相手がいるといいなという気持ちが芽生えていた頃、Facebookでtentenのイベント広告が流れてきました。若いママや夫の転勤についてきた奥様たちが集う会で自分とは属性が違うのではないかと、興味はあるけどどんな人が来るかわからないし…と参加するのを躊躇していました。

tentenのSNSにはとりえず登録し、情報が入って来る状態に。約1年後tenten cafe「大人会」の参加者募集のお知らせが。そこには「お子様連れNG」「自分のことを話しましょう」とあり、これなら私も参加できそう！元々田舎の濃い地域コミュニティが苦手だったけど、地域の垣根なくヨソモノ同士が集まるこういう会なら気軽に雑談ができるかもしれないと申し込みをしました。

実際に参加してみると同じように自分の仕事で転入した人や色々な背景を持った人、福島で色々なことにチャレンジしている人が多く、そういう人の話を聞いたりおしゃべりができて楽しい時間を過ごすことができました。そこで出会った人とはその後たまにランチに行ったり、飲みに行ったりすることも。その飲み屋もtenten cafeで出会った女性の旦那さんがオーナーのお店でした。Iさんが求めている他愛もない会話をして笑って過ごす時間と、そこに行けば知っている人がいるという居場所ができたのです。

今春、東京への転勤が決まったIさん。「福島で知り合った人たちがまた来てほしいと言ってくれているし、せっかくながつながった人がいるので、なにか理由をつけて定期的に福島には来たいと思っています。勝手に福島の関係人口になるつもりです。九州に住んでいる時は、福島と東京がこんなに近いと思っていなかったです！」Iさんの表情は福島生活を満喫した清々しさに溢れています。

自らの転勤により単身で福島市に転入したIさん。一人暮らしを満喫し、一人での行動も苦にならず特に困ったこともなく過ごしていたようです。しかしtentenに来てくれたことをキッカケに、これまでただの勤務地として生活していた福島に自分の居場所ができたと言ってくれました。たわいもないおしゃべりをして笑い合える人と場所があることで、福島での一人暮らし生活に彩りが加わったのではないのでしょうか。福島を離れた後でもまた戻ってこられる、おかえりと言ってくれる場所があることが関係人口としてずっと福島と関わり続けてくれる鍵になることでしょう。tentenにもまた気軽に遊びに来てくださいね！

## 不安に押し潰されながらの転入。 福島で縁が繋がって関係人口となった Tさん(30代)

岐阜県出身。名古屋で仕事をしている時に結婚。同時に旦那さんの福島異動が決まり、仕事を辞めて2021年3月に福島市に転入。2023年10月愛知県へ転出。



福島県がどこにあるかも分からない状態での引っ越し。福島行きの新幹線の中、旦那さんが寝ている隣で不安から寝る気にはなれなかったTさんは「福島 転勤」「福島 子なし夫婦 コミュニティ」など必死に検索。そこでtentenのサイトを見つけました。イベント情報などが更新されていたので「ちゃんと活動している団体だ！」と思い、新幹線の中からFBコミュニティに登録、メッセージを送信しました。すぐに代表の藤本から返信があり、繋がっている人が福島にいるというだけで安堵感が芽生えました。

福島市に転入してしばらくしてから、tentenの事務所を実際に訪問しました。そのころはNetflixを見る日々で久しぶりに夫以外の人と話し、福島での不安や仕事に対する悩みを藤本に相談しました。福島に来てから、東日本大震災後のイメージとはまるで違う福島の様子や食べ物の美味しさに驚き、福島を知らない他県の人たちに教えてあげたいという想いも芽生えていました。そんな想いも打ち明け、話しているうちに自分がやりたいことは、福島に関わることだと気付きます。

藤本からFターン(福島県就職情報支援センター)への就職相談を提案され、早速登録。タイミングよく福島県の地域振興を行う地方団体への就職が決まり、地域の人と関わる機会ができました。職場の人も他県から来たTさんを気遣って福島の事をたくさん教えてもらい、プライベートで自宅に伺うなど仲良くしてくれる人も。福島のお母さん、お父さんと呼べる関係になる人もできました。

tenten cafeでは自分のこれまでのキャリアやこれからのことをポジティブに話す人たちにも出会いました。いろいろな地を転々として自分より大変な思いをしているにも関わらず、やりたいことを前向きに話す人たちでした。自分は特別じゃない、自分にしかできないこともあるはず。転入者だからできることがあり、転入者だからこそ目線が価値になることに気付きました。いつの間にかその思いはtentenの活動を私もやりたい！という想いに変わっていきました。

その後、夫の転職が愛知に決まり福島を離れることに。元職場からも戻っておいで、と言われたことも愛知に戻る背中を押しました。「福島を離れる時には、何度も泣きました。来たばかりの頃は、こんなに福島に愛着を持つことになるとは思っていませんでした。福島から離れても、定期的に連絡を取り合う人たちがいます。」福島と繋がってたくて、福島情報を発信しているSNSもフォローし続け、また家族で遊びに行きたいと考えています。

愛知に戻ってきて感じるのは、福島のマイナスのイメージはまだ根強いということ。福島に住んだからこそ実感した福島の良さ、仕事を通じて学んだ福島のこと、それを自分の周りに発信していきたいと思っています。「自分が悩んでいることって一人じゃない。動くことで、変えられるということをtentenから学びました。社会に貢献するって、会社に所属して働くことぐらいしかイメージなかったけど、そうじゃない。それを知れただけでも福島に行ったことに価値があると思っています。」tentenのような活動をしたい！という想いはこのように昇華しました。

最初にtentenの事務所に不安げに訪れたときから、別人のように強くなったTさん。「福島に来てよかった。本当にいい人たちと出会えました！」と話してくれました。福島で人と繋がり、福島を深く知ったことで、Tさんは転出してからも福島と繋がり、福島を発信し続けてくれる存在になりました。tentenもTさんとの関わりをずっと持ち続けていきます。